授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 1975 号

Renal scarring/function in high grade vesicoureteral reflux patients with anorectal malformation and bladder/bowel dysfunction

（直腸肛門奇形、膀胱直腸障害を有する高度膀胱尿管逆流の腎機能障害）

三宅　優一郎（みやけ　ゆういちろう）

博士（医学）

論文内容の要旨

直腸肛門奇形には膀胱尿管逆流症の高頻度合併は知られているが、近年膀胱尿管逆流症において膀胱直腸障害が尿路感染症や腎機能障害に関与していることが報告されている。直腸肛門奇形には膀胱直腸障害の合併が多いことより、直腸肛門奇形を伴う高度膀胱尿管逆流の腎機能障害について後方視的に検討した論文である。

2000 年から 2014 年までに当科で治療を行った高度膀胱尿管逆流症(grade3 以上)を後方視的に検討した。直腸肛門奇形群(以下直腸肛門奇形(+))、直腸肛門奇形を認めない群(以下直腸肛門奇形(-))の 2 群間で患者背景、膀胱尿管逆流の grade、尿路感染症の頻度、抗生剤予防内服の有無、膀胱直腸障害の有無、DMSA シンチグラフィ結果を元にした腎機能障害度について検討し、直腸肛門奇形における腎機能障害、膀胱直腸障害、高度膀胱尿管逆流の相関について検討した。

患者背景、膀胱尿管逆流の grade、尿路感染症の頻度、抗生剤予防内服、フォローアップ期間に有意差は認めなかった。直腸肛門奇形(+)は直腸肛門奇形(-)と比べ膀胱直腸障害の合併が有意に高く、また DMSA における腎機能障害度も高かった。また、直腸肛門奇形(+)は直腸肛門奇形(-)と比べ、先天的な腎機能障害度は高く、さらに腎機能障害のリスクファクターである膀胱直腸障害の合併頻度も高いが、経過観察期間中に腎機能低下は認めなかった。直腸肛門奇形および膀胱直腸障害は尿路感染症のリスクファクターであることが知られているが、直腸肛門奇形(+)は直腸肛門奇形(-)と比べて尿路感染症の頻度に有意差はなく、腎機能低下を認めなかった。このことは直腸肛門奇形(+)では膀胱直腸障害について適切に評価し治療介入を行っていることに起因すると考えられた。以上より直腸肛門奇形(+)においても、膀胱直腸障害を適切に評価、治療することで尿路感染症や腎機能低下を防ぐことができると示唆された。